

ヴァラッロのサクロ・モンテの彩色木彫

—第 43 堂<キリストの墓>内の《死せるキリスト》像の制作者・制作時期の再考—

関根浩子（崇城大学）

2003 年に「ピエモンテとロンバルディアのサクロ・モンテ群」としてユネスコの世界遺産に登録された 9 施設のなかでも、ヴァラッロのサクロ・モンテは、最古の施設であるだけでなく、彫刻や壁画によって礼拝堂内に表現された聖なる場面が質的に極めて高いという点で、宗教建築史上、また美術史上もっとも重要な施設である。

この巡礼施設は、主に、①初期（B. カイーミによる構想の具現期）（1491-1530 年頃）、② G. アレッシによる新計画と再整備構想期（1565-69 年）、③ ミラノ大司教聖カルロ・ボッロメオによる新計画と再整備構想期（c.1570 -1585 年）、④ ノヴァーラ司教カルロ・バスカペの最終決定による再整備構想期（1593-1640 年頃）の 4 期を経て現在の形態に至ったものである。現在の施設は、登山路上の 5 つの小礼拝堂と山上の聖域内の 45 の礼拝堂、並びに聖母被昇天教会堂や復活のキリストの泉といった宗教建築や象徴的モニュメントなどによって構成されている。そして 45 の礼拝堂は、一部の礼拝堂を除けば、いずれもキリストと聖母の生涯のエピソードに関係しており、多くは 16 世紀後半以降に建設されたものである。

これらの礼拝堂のうち、現存する最初期の数少ない礼拝堂のひとつである<キリストの墓>（現在の第 43 堂）の墓室内に配されている彩色木彫《死せるキリスト》像は、1566 年から 19 世紀中頃まで長きに渡ってガウデンツィオ・フェッラーリによって初期に制作されたものと推測されてきた。ガウデンツィオへの帰属はさらに、20 世紀後半の幾人かの主要な研究者の主張するところでもあった。そして発表者自身も、昨夏における調査の前まではガウデンツィオ帰属説に疑問を抱くことはなかった。しかし、彩色木彫調査のために久し振りに訪れたヴァラッロで、修復後の《死せるキリスト》像を間近から観察したり、同様に山上にあるサクロ・モンテ・ディ・ヴァラッロ特別保護区サクロ・モンテ管理運営財団所長エレナ・ディ・フィリップ女史から修復時の画像データをご提供頂いたりしたことで、像の構造や用いられた技法、作品としての質などが明らかとなり、ガウデンツィオへの帰属に疑問を抱かざるを得なくなった。

そこで本発表では、まずヴァラッロの施設の最初期の礼拝堂と堂内のミステリー場面に関する概観、並びに現存する初期の彩色木彫群の確認を行った後、第 43 堂の《死せるキリスト》像に特化し、先行研究による制作者や制作時期についての推察や作品評価の整理を行いたい。続いて、2006 年に開始された修復に関するディ・フィリップ女史の報告と制作者・制作時期に関する推察、提供された修復時の写真などをもとに、諸先行研究の批判検証を行いながら、作品の制作者、制作時期の再考を試みたい。